



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	テクノロジーと移民のアメリカニズム : スウェーデン系移民社会による軍艦「モニター」とジョン・エリクソンの表象
Author(s)	土田, 映子
Citation	アメリカ研究, 43, 155-173
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/43948">https://hdl.handle.net/2115/43948</a>
Type	journal article
File Information	tsuchida.pdf



## テクノロジーと移民のアメリカニズム

—スウェーデン系移民社会による軍艦「モニター」と  
ジョン・エリクソンの表象—

土田 映子

### はじめに

そうです、それがスウェーデン系の若い世代の多くが持つ夢です。建築家、技師、電気技師…彼らがシカゴ界隈の大きな大学に進むとき、最も選ぶことが多いのはこうした分野なのです。

—WGN 放送ラジオ番組『シカゴのスウェーデン系の人びと』（1946年）  
台本より<sup>1)</sup>

第二次世界大戦終結後間もない頃に放送されたこのラジオ番組の台本からは、当時の若者たちにとって技術職が憧れの対象であったことが伝わって来る。ちょうど後年の宇宙飛行士のように、建築家や技師が時代の先端に行く職業とされた時代であった。スウェーデンからの移民はアメリカの都市化が急速に進んだ 19 世紀末、多くが建築労働者として働いたが、その子どもや孫たちの世代は拡大する高等教育の恩恵を受け、専門的知識を備えた技術者として建築産業に携わることを望んだのである。

社会進歩の導き手としての技術者のイメージは、この時代までの数十年間に醸成され、一種の文化的シンボルとしての役割を持つに至った。その最も有名な例は発明家のトマス・A・エジソン（1847-1931）であろう。この「メンロー・パークの魔術師」は、素朴で勤勉と実践を重んじる<sup>セルフ・メイド</sup>独立独行の成功者という、伝統的なアメリカの英雄像に合致する存在として偶像化され、その動向や人物伝は新聞・雑誌・子ども向け出版物などによって社会の隅々にまで届けられた<sup>2)</sup>。1870年代から急速に進行したアメリカの産業化と富の蓄積は、技術革新が物質的豊かさと社会進歩に直結するという信念を社会の中に生んだ<sup>3)</sup>。アメリカにおける技術革新の主役は、エジソンを初めとする民間の発明家から、第一次世界大戦後には大企業の研究開発室に勤務する科学者・技術者へと変わり、新技術の福音をもたらす社会

的英雄の代表的イメージも同様に変貌していくのだが<sup>4)</sup>、こうしたアメリカの主流社会によって称揚される技術者イメージに加え、スウェーデン系アメリカ人社会が受け継いできた文化的シンボルがあった。南北戦争で功績を挙げたスウェーデン出身の発明家、ジョン・エリクソン(John Ericsson, 1803-1889)とその創造物、軍艦「モニター」(the *Monitor*)である。

この論文では、ジョン・エリクソンがスウェーデン系アメリカ人社会によって民族の英雄としての地位を付与され、その「愛国的技術者」という英雄イメージが、アメリカ中産階級への社会的・経済的進出を図るスウェーデン移民にとっての規範的役割を担うことになった過程について、移民集団とアメリカ主流社会との間の文化政治の交錯という観点から検討する。スウェーデン移民は比較的アメリカへの同化が容易な集団とされてきたものの、本国の産業化の遅れを背景に移住してきた多くの農村出身者の印象から、アメリカにおけるスウェーデン移民には愚鈍・粗野というイメージがしばしばつきまとった<sup>5)</sup>。そうした中で、世紀転換期を中心に増加したスウェーデンの中産階級出身者や都市生活経験者の移民は、先住のヨーロッパ移民、特にドイツ移民を模範としながら、アメリカ社会でのスウェーデン系の地位を上昇させることに心をくだいた。折しも到来したアメリカの産業化とそれに伴うテクノロジーの前景化は、こうした移民共同体の文化的リーダーたちにとっては掴むべき機会であった。

エリクソンと「モニター」の物語はアメリカ社会に広く膾炙し、今日においても繰り返し語り直しが行われているものだが、多くの場合はある定型に沿って語られてきた。一南北戦争時、北軍はエリクソンを装甲艦建造のために雇ったものの、保守性と無知から彼の卓越した発想を正当に評価せず、そのためエリクソンは苦難を強いられた。だが、南北戦争においてエリクソンの「モニター」は南軍の装甲艦との戦いに勝利し、北軍を勝利に導いただけでなく、木造・帆走の軍艦の時代が終わったことを世界に示した一というものである。こうした定式的な語りは、「モニター」の悲劇的かつ英雄的な最期(沈没)を含め、ウィリアム・コナント・チャーチの手になるエリクソンの伝記を主な原型として成立したといわれる<sup>6)</sup>。一方、エリクソンと「モニター」のアメリカにおける記憶と記念において、スウェーデン系アメリカ人社会の政治団体や教育・出版組織、技術者組織等が深く関わっていた事実は、スウェーデン移民研究の中で指摘されてきたことである。本稿ではこうした指摘を一步進め、アメリカ社会におけるテクノロジー信奉の形成・強化に、移民集団による文化政治が寄与した可能性

を示唆する例として、エリクソンと「モニター」を記念・記憶するスウェーデン系アメリカ人社会の言説と活動について検討していきたい。

エリクソンの人物像や「モニター」については、南北戦争当時から今日まで様々な一般向け及び学術的著作において取り上げられてきた。その多くは、「モニター」の戦いを南北戦争中の逸話として取り上げるもの、孤高の天才発明家としてのエリクソンの伝記、または軍事・海洋技術史の中に「モニター」を位置づけるもののいずれかに分類される。デイヴィッド・ミンデルの著作は、これらとは異なるアプローチを採用している点で注目される (David A. Mindell, *War, Technology, and Experience aboard the USS Monitor*: John Hopkins University Press, 2000)。題名が示すように、ミンデルは「モニター」艦上で生活し戦闘に参加した乗組員の経験と実感を彼らの手記等から丹念に掘り起こし、それをジャーナリズムなどの外部の観察者が喧伝していた理想化された「モニター」のイメージや、エリクソン自身の主張する理論上の「モニター」の航行・戦闘能力と比較対照した。ミンデルはここから、乗組員の生命を脅かすほどの過酷な艦内状況(高温、換気の悪さ、水漏れ)及び戦闘上の困難と、エリクソンが製図机上の設計と計算に基づいて主張していた「モニター」像との間には、決定的な乖離があったことを指摘した。この中心的議論に加えてミンデルは、ナサニエル・ホーソンとハーマン・メルヴィルが「モニター」について書き残した内容から、彼らが「モニター」をどのように解釈したかについても検討している。二人の文学者にとっては、「モニター」は機械が支配する戦争の時代の到来を告げるものであった。そこからは、生身の人間の熟練や勇気などは時代遅れのものとして疎外されている。これらの観察からミンデルは、テクノロジーの意義は単にその有用性・利便性にあるのではなく、文化的アイコン(cultural icon)としての役割にもあると結論づけている。技術的革新の産物はその物理的機能や性能によってのみ現実に関与するのではない。それは一つの時代、思想、力などを象徴することによって、人々の現実認識と行動のあり方に影響を及ぼし得るものである。

ミンデルのものを含め、エリクソンと「モニター」を扱った著作群は「モニター」が国際的に有名になった経緯を詳しく伝えている。一部の著作はエリクソンと「モニター」がどのように記念され、記憶されたかについても頁を割いている。例えば、現時点で最も新しいエリクソンの伝記は、アメリカ・イギリス・スウェーデンにおけるエリクソンと「モニター」を記念した行事や企画の例を多数挙げている<sup>7)</sup>。しかし、スウェーデン系アメ

リカ人社会とその文化的英雄としてのエリクソンの関係を主題として論じた著作はまだない。スウェーデン移民の歴史と文化を論じた先行研究のいくつかは、移民集団内で正統とされるアメリカ史観の中にエリクソンが重要な歴史的人物として位置づけられていることを指摘しているが、これらの指摘は散発的なものにとどまり、アメリカの社会と文化そのものの変容に結びつけて論じられてはいない。スウェーデン移民史においてはスウェーデン民族主義とアメリカ愛国主義に基づくアメリカ史観（スウィディッシュ・アメリカニズム）中の逸話として扱われてきたエリクソンと「モニター」の物語を、ミンデルの指摘する「文化的アイコンとしての技術<sup>テクノロジー</sup>」という概念と接続させれば、移民共同体内部の文化の一側面として扱われてきた現象を、産業資本主義に主導されたアメリカ社会全体に及ぶ世界観の転換を構成する要素として捉え直すことが可能になると考えられる。

スウェーデン移民社会の内部で正統とされたアメリカ史観において、エリクソンと「モニター」の物語が際立った重要性を与えられ、また長期にわたってその地位を保ち続けたことの背景には、当然ながら南北戦争そのものの歴史的重要性がある。合衆国の建国と発展の神話として語られる種類のアメリカ史の中で、南北戦争と同等の地位を与えられている歴史上の出来事がそれほどたくさんあるわけではない。二つの世界大戦を経験する以前であれば、そこに含まれるのは新大陸へのヨーロッパ人の到達、植民地時代における開拓事業、そしてアメリカ独立革命であった。このアメリカの物語が確立するのに伴い、様々な移民・エスニック集団がその物語への自集団の貢献を探し出し、それらを宣伝することに奔走したが、スウェーデン系アメリカ人も例外ではない。しかし、エリクソンと「モニター」にまつわる一連の言説が19・20世紀の転換期に形成された過程には、上に述べたようなアメリカの歴史的大事件に関係しているということの他に、すぐれて時代的な今ひとつの側面がある。それは、技術というものに人々がこれまでにない社会変革の力を見出したことであり、技術を支配し制御する力の有無がひとつのネーション＝国民／民族／移民集団の優秀性に直結するという、新しいナショナリズム言説の萌芽がみられたことであった。

## 1 ジョン・エリクソン、「モニター」とハンプトン・ローズの戦い

ジョン・エリクソンはスウェーデンの鉱山技師の子として生まれ、少年時代から父親やその同僚たちの手ほどきのもとで技術的知識を吸収し、実地での経験を積んだ。スウェーデン陸軍で地図作成等の任務に従事した後

にイギリスへ渡り、ここでエンジンの開発に取り組んで13年間を過ごしたが、機関車の制作コンペティションでジョージ・スティーヴンソンに敗れたり(1829)、開発費がかさんだ末に負債のため投獄されるなど(1832)、滞英中の職業生活は順調とはいえなかった。渡米したのは1839年のことで、エリクソンの開発した新式の蒸気船に目を留めたアメリカ合衆国海軍士官ロバート・F・ストックトンの招きによるものであった。エリクソンは翌年から合衆国海軍での使用に向けて蒸気エンジンを動力とする軍艦の開発に着手し、コルヴェット艦「プリンストン」の完成にこぎつけた。ところが、1844年、タイラー大統領を初め多数の要人が出席していた船上イベントで、ストックトンが開発して「プリンストン」に搭載していた大砲の砲身が爆発し、國務長官や海軍長官を含む6人が死亡、17人が負傷するという惨事を引き起こしてしまう。事故の責めはエリクソンに負わされ、以後南北戦争まで、エリクソンは海軍の仕事から遠ざかることになった<sup>8)</sup>。

転機が訪れたのは1861年4月のことであった。ヴァージニア州のノーフォーク海軍工廠<sup>しょう</sup>には当時合衆国海軍の最新鋭軍艦とされたフリゲート艦「メリマック」(正式には *Merrimack* だが、慣用では *Merrimac* と記される)が停泊していた。軍艦の主流はまだ木造の帆船であったが、「メリマック」は蒸気機関と帆の両方を備えていた。南軍が進攻してきた際、北軍は「メリマック」が南軍の手に落ちるのを防ぐため、これに火を放ってから逃れた。しかし、「メリマック」の船体のかなりの部分が燃え残り、南軍は「メリマック」を改造して装甲艦とすることを思いついた。当時、ヨーロッパでは装甲艦が登場し始めており、クリミア戦争の際にその戦闘における木造船に対する優位が確認されたことで、南軍・北軍ともに装甲艦を入手する必要性を認識していたのである。技術力・工業生産力に劣る南軍は装甲艦を一から建造する能力は持たなかったが、「メリマック」の改造によってその問題を乗り越えられると考えたのであった。

「メリマック」が改造されつつあるとの情報は北軍の諜報員のほか、新聞報道を通じても北部側に伝えられ、北軍は初めて装甲艦の建造を真剣に検討し始めた。「メリマック」が装甲艦として復活すれば、東部海岸線の海上封鎖が破られ、南軍がヨーロッパからの支援を得ることが可能になる恐れがあったからである。リンカン大統領の命によって設立された装甲艦検討委員会の公募に応じて採用された案の一つがエリクソンのものであった。海軍とエリクソンとの相互不信を仲介者が和らげる努力が続けられる一方、1861年の9月末には契約が交わされ、装甲艦の建造が始まった。完

成期限は百日後、失敗作であった場合は海軍は一切の費用を負担しないという厳しい契約内容であった。ニューヨークとボルティモアの複数の鉄工所の協力によって建造され、エリクソン自身によって「モニター」と名づけられた装甲艦は、全長 172 フィート、幅 41 フィートと決して大きくはなかったが、甲板上に回転する砲塔を載せ、簡潔を極めたその外観は、当時の目には超近代的と映るものであった。

「モニター」と、改造後「ヴァージニア」と再命名された「メリマック」がヴァージニア州沿岸、チェサピーク湾と三本の川が出合うポイントであるハンプトン・ローズ（Hampton Roads）<sup>あいまみ</sup>で相見えたのは 1862 年 3 月 9 日のことである。「ヴァージニア」はこの海域で前日に 2 隻の北軍の船を沈めており、この日は座礁したもう 1 隻への攻撃を再開するところであった。南北両軍に加えて英仏の軍艦も見守る中、「モニター」は座礁した船を守る位置で「ヴァージニア」と砲火を交えた。装甲艦同士の戦いは互いの船体に損害を与えるに至らないまま、3 時間余りが過ぎたところで、操舵

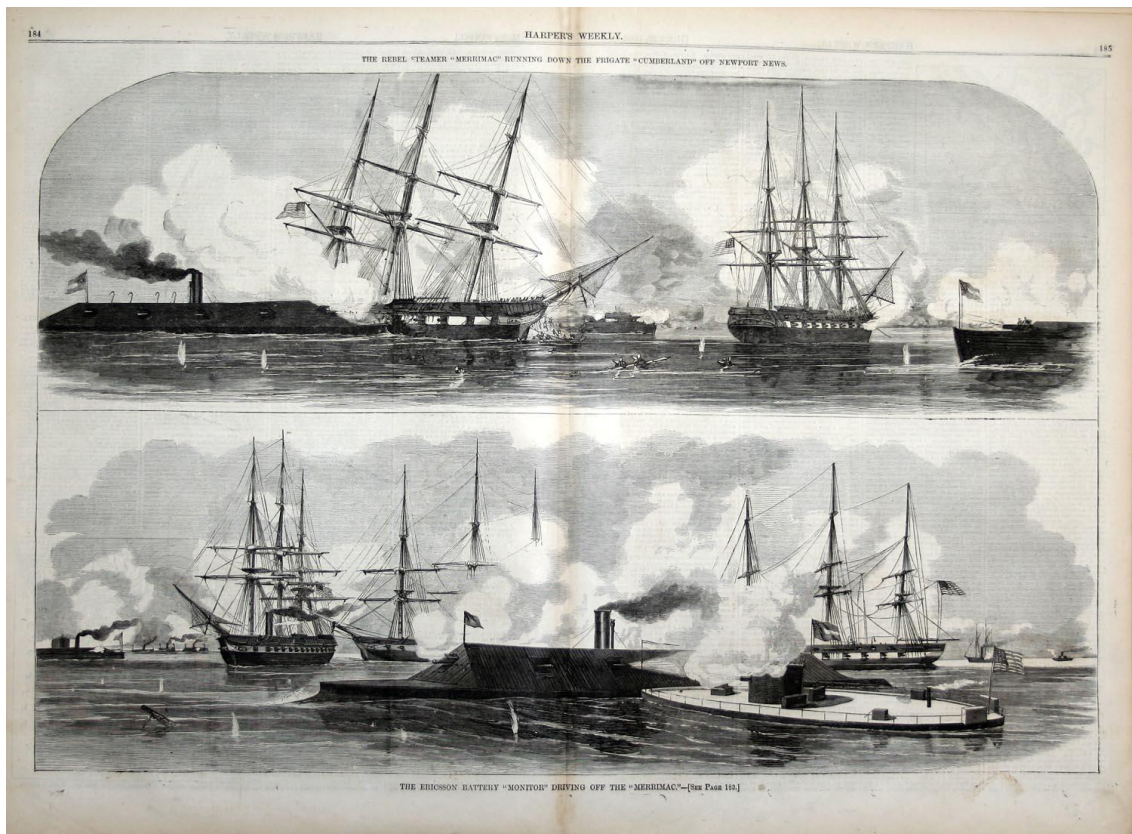


図1 上段：北軍の船を攻撃する「ヴァージニア」（左端）、下段：「ヴァージニア」と戦う「モニター」（右手前）（*Harper's Weekly*, March 22, 1862）

室の装甲板に<sup>うが</sup>穿たれたスリットから外を見ていた「モニター」艦長が、スリットから吹き込む爆風で負傷した。「モニター」の指揮官の交代が行われている間に「ヴァージニア」はエリザベス川方面へ引き上げ、「モニター」は追跡せず、この日の戦いは幕を閉じた。

## 2 「モニター」の伝説化

曖昧な結末に終わったハンプトン・ローズの戦いの直後、南軍と北軍の両者が勝利を主張したものの、北軍に加えて北部側の報道陣や一般民衆によって「モニター」とその乗組員は一躍、勝者として祭り上げられた。『ハーパーズ・ウィークリー』1862年3月22日号は「モニター」とその艦長の肖像のイラストレーションで表紙を飾り、見開き2ページの特集記事には「ヴァージニア」が北軍の船を沈めるさまと、「モニター」と「ヴァージニア」との戦いの模様の挿絵がついていた(図1)。大西洋の対岸では、ロンドン『タイムズ』の以下の記事に代表されるような波紋が広がっていた。

[英国首相の] パーマストン卿は…わが国の木造戦列艦、言い換えればただ2隻を除いたわが国のすべての軍艦には、「戦闘で装甲艦の相手をする能力はない」と認めた。これが今や公に告白された、かのハンプトン・ローズの戦いの結果なのである。…もしわが国の頼りない船一つまり、わが国の木造船が一無敵の「モニター」2、3隻ばかりに不意打ちされるにまかせておいたならば、その全部が極めて確実かつ容易に破壊されるであろう<sup>9)</sup>。

「モニター」は世界初の装甲艦というわけではなかったが、その設計思想が旧来の木造船とは根本的に異なっていた点で、既存の装甲艦とは一線を画していた。外見のみを取ってみても、「チーズの<sup>はこ</sup>函を乗せた<sup>いかだ</sup>筏」と呼ばれたように、動力源がどこにも見えず水平な甲板に砲塔だけが突き出した姿は極めて特異なものであった。それは「時代が変わった」と人々に思わせるのに十分な説得力を有していた。

春のハンプトン・ローズ停泊中、また秋のワシントンにおける整備期間中に多くの内外からの見物客を集めた「モニター」であったが、同じ年の12月、ノースカロライナ州沿岸の海上封鎖に加わるために当地へ向かう途中、嵐に遭って沈没する。「モニター」は外洋航海には適さない種類の船だ

ったのである。それにも関わらず、南北戦争の期間を通じて北軍は「モニター」タイプの軍艦を発注し続けた。だが、実際の戦闘で明らかになったのは、相当な設計改善を行なっても「モニター」タイプは荒天に弱く、また乗組員に過酷な居住環境に耐えることを強いるということであった。エリクソンはこうしたことが問題になるのは乗組員の技量や忍耐力が足りないからだと主張し、設計上の問題があるとは認めようとしなかった<sup>10)</sup>。

南北戦争の終結後、人々の関心の的から外れていった「モニター」が再び脚光を浴びるのは、終戦から20年あまりが過ぎて南北戦争を振り返る機運が高まってきた時代のことである。1880年代にはニューヨークに「モニター」と「ヴァージニア」の戦いを再現したパノラマ館が開館して観光客を集め、雑誌の南北戦争回顧特集にはハンプトン・ローズの戦いの目撃談・体験談が掲載された<sup>11)</sup>。戦後も動力機関の開発に没頭していたエリクソン自身は、1889年に85歳で没したが、その報道によってようやく人々の記憶によみがえったのであった。エリクソンの遺骸は一時的にマンハッタンに葬られた後、スウェーデン政府の要望によって翌年アメリカ海軍艦に運ばれて彼の生地近くに埋葬された。この時、ストックホルムではエリクソンを迎える盛大なセレモニーが行われた<sup>12)</sup>。初めに紹介したチャーチによる伝記が出版されたのは同じ1890年なので、この頃にエリクソンと「モニター」の一般の人々に記憶される物語の定型は確立したといえる。

先に述べたように、エリクソンの死去の報が流れるまで、彼の存在は一般のアメリカ社会においては忘れ去られていたも同然であった。しかし、この間にエリクソンの功績を記念しようとする動きが全くなかったわけではない。1882年、シカゴではスウェーデン移民の間で自分たちの英雄の銅像を市内に建てようという運動が行われていたが、エリクソンの名前も候補として挙がっている。この時は結局、18世紀の博物学者カール・リンネが選ばれたが、それは銅像は本人の存命中に建てるものではないという慣例に基づく判断があったためとされる<sup>13)</sup>。

その後、スウェーデン系アメリカ人社会の内部では、エリクソンはスウェーデン移民の歴史とアメリカ合衆国の歴史を<sup>な</sup>縋い合わせる重要な人物として語り継がれるようになった。スウェーデン語読者向けの雑誌などの商業出版物やスウェーデン系の学校で使用された歴史教科書にエリクソンと「モニター」の物語がたびたび登場したことは、スウェーデン移民史の研究者によって指摘されている<sup>14)</sup>。こうした移民社会内部を対象とした歴史物語の普及とは別に、同国出身者の輪を越えて一般のアメリカ社会への働

きかけを行った活動もある。本稿の以下の部分では、イリノイ州スウィディッシュ・アメリカン共和党同盟（The Swedish American Republican League of Illinois、以降 SARLI）の活動を中心に、スウェーデン移民共同体によるエリクソンの記念と記憶のあり方を検討する。

### 3 スウェーデン系共和党団体によるエリクソンと「モニター」記念

SARLI は、共和党の票固めを目的として 1894 年 12 月に設立された団体である。南北戦争の頃から世紀転換期にかけてスウェーデン移民の間では共和党支持者が圧倒的に多く、また 1880 年代からは、スウェーデン系の政治家が地方政治だけではなく国政にも進出を果たしつつあった<sup>15)</sup>。つまり、SARLI はスウェーデン系の政治家たちがアメリカ社会の中で顕在化し、かつスウェーデン移民が共和党の票田として認識されるようになった時代を背景として設立されたといえる。

SARLI におけるエリクソンのシンボリックな役割は、その設立当初からはっきりしていた。SARLI はその第一回年次総会を、ハンプトン・ローズの戦いの 33 周年にあたる 1895 年 3 月 9 日にシカゴで開催し、この時に SARLI の綱領として採用された決議文の中にエリクソンの名前が見える。

右決議する。我々は共和党の根本方針を維持しこれを普及させるために団結するものである。加えて一方、我々の認識する共和党员各人の務めとはこれらの方針に忠実なる支持を与え、彼の最大限の個人的努力をその領域に傾けることであるが、北部そしてすべての自由を愛する人々の望みはそれにとどまるものではなく、この州同盟は [ハンプトン・ローズの戦いの] 33 周年の今日、愛国的誇りとともにモニターの創案者であるジョン・エリクソン<sup>キャプテン</sup>大尉の功績を想起し、我々は彼の非凡なる才と、自由の大義及び連邦の保全への顕著なる功労を称えるものである<sup>16)</sup>。

この決議文から読み取れるのは、南北戦争の大義が共和党の存在意義そのものの一つの柱として位置づけられる一方、エリクソンが「モニター」を北部にもたらしたことで、「(共和党の) 方針に支持を与え」「最大限の個人的努力」を傾けた模範的存在とされていることであろう。また、以下に挙げるのは総会後のエリクソンを記念する晩餐会で行われたスピーチのうちの一つの抜粋であるが、スウェーデン系アメリカ人社会の正統的アメリカ史観と、その中でのエリクソンの位置づけが明示的に語られている。

今宵わたしたちが思い起こすのは、スウェーデン系アメリカの歴史（Swedish-American history）における最も大きな出来事、わたしたちの民族（our nationality）が生み出した最も偉大な種の人間性、そして世界史上、真の愛国者及び天才であったうちの一人についてです。…南北戦争でこれ[「モニター」による「ヴァージニア」の撃退]よりも重要な出来事はなく、この傑出した同郷人のものよりも強い腕が国旗と連邦を護るために振り上げられたことありません。彼の名声は遠く広く伝わり、苦しんでいた黒人奴隷たちを含む何百万という人々が彼の名を神から遣わされた救い主のものと認め、不朽の名声を誇るリンカンとグラントの名とそれを結びつけるようになりました。…彼は典型的かつ理想的なスウェーデン系アメリカ人であり、愛国心と勤勉、愛情と努力を併せて人類の福祉のために捧げた人物でした。ですから、このめでたい日にスウェーデン系アメリカ人として集い、「モニター」と連邦の勝利におけるエリクソンとスウェーデンの功績を記念するのはなんと至当なことでありましょうか<sup>17)</sup>。

このスピーチを行ったカール・R・チンドブロムは、後に下院議員を務め（1919～1933年）、長くシカゴのスウェーデン系コミュニティの政治的・文化的リーダーの一人として活躍した人物である。チンドブロムが述べているエリクソンと「モニター」のイメージは、スウェーデン移民共同体内において文化的正統性の決定権を握っていた階層の解釈枠組みに合致するものと考えられる。エリクソンは第一に、「わたしたちの民族」、スウェーデン人の血を引く人々の中から生まれた偉人であり、第二には、自由の守護者であるという理由で、「リンカンとグラント」、つまり南北戦争におけるアメリカ最大の英雄たちと並び称されるべき存在であるとされる。このようにして、民族という血縁的紐帯で結ばれた集団が、自由という政治原理を紐帯として成り立っている国家を支える原動力として賞賛される。先に触れたように、現実のエリクソンは才能溢れる人物ではあったが、彼を終始突き動かしていたものは技術的革新性と完成度への執念であり、アメリカへの忠誠その他のイデオロギーの役割はあったとしても副次的なものにとどまっていたと思われる。しかし、英雄というものを語る多くの言説と同様に、実際のエリクソンと正統的解釈を経た後のエリクソン像の乖離はここでは不問に付されているのである。

SARLI の年次総会とエリクソンを記念する晩餐会は以後も毎年行われ、その開催告知や当日の様子はスウェーデン系新聞によって広く報じられた。シカゴを初めとするイリノイ州内の各都市で発行されるこれらの新聞は、時には総会に出席する地域代表者の選出に直接関わることもあった。スウェーデン系新聞が移民コミュニティの政治的世論の形成に深く関与していたことはよく知られており、SARLI の総会と晩餐会で繰り返されたようなエリクソンと「モニター」に関する賛辞がこうした新聞の読者たる一般家庭にも届いていたことは間違いないと考えられる。

SARLI におけるエリクソンへの評価はまた、科学・技術の力、特に新時代における科学と技術の総合力への賛辞という形を取っても現れた。先に引用したスピーチの中で、チンドブロムは次のように述べた。

エリクソン自身は発明家 (inventor) と呼ばれることには反発を示していました。彼は造船技師 (constructor) であり、「われらの時代の最先端のエンジニア」でありました。彼の傑出した知性が導き出す一つ一つの結論はみな科学的方法によって得られたものでした。彼は数学、物理、そして力学について素晴らしい直観力を持っていました<sup>18)</sup>。

同じくチンドブロムの、1898 年の第 5 回エリクソン記念晩餐会におけるスピーチにも以下のような表現がある。

エリクソンの才能は時代を象徴するものでした。現代は物質的進歩、及び機械的発明と建造の時代です。われわれは自然の力を活用し、人間の筋力を機械で置き換えることに成功してきました<sup>19)</sup>。

発明や技術革新の担い手は、こつや経験に頼って成果を挙げてきた職人や機械工からより専門的な知識を持つ技術者、20 世紀に至って科学者へと変化していくが<sup>20)</sup>、その過渡期にあった世紀転換期に、エリクソンが時代を先取りしていた存在として捉えられているのが分かる。このようにして、エリクソンは自由というアメリカの政治原理の守護者として表象されるとともに、アメリカ産業社会の発展の立役者としても表象されたのである。

一方、こうした主張はスウェーデン系アメリカ人の、アメリカ社会の中での評価や扱いへの不満を背景としていた面もある。1896 年の第 3 回エリクソン記念晩餐会においては、以下のような述懐も聞かれた。

2、3 日前のことですが、こんな記事が大新聞に載りました。「現在、両政党はこの州の大人数から成るスウェーデン系社会に色目を使って票を取ろうとしているが、それは極めて望ましからぬ昔のノルウェーの農奴の血筋の者や血も涙もない略奪者の子孫に権力を与えるということの重大性を考えない行為である。良いスウェーデン人は人間の中でも最も高潔で模範的な類に入るが、残念ながらそういう人間は稀であり、大多数はずるく、攻撃的で、偏狭で、自分勝手に、激しやすく、反抗的で、党派的で、自分と他人のものの区別もつかない。…」…この記事は一人以上の人間、あるいは集団の意見を表しており、この国の一部の国民の感情を表明しているに違いないことを認めないわけには行きません。そうでなければ公の出版物に載るはずがないからです<sup>21)</sup>。

移民に対する社会の目が、政治的野心や社会的上昇志向を持つスウェーデン系アメリカ人にことさらに共和国の理念への忠誠を誓わせ、アメリカ社会の発展に寄与している印象を作ろうとさせたことは想像に難くない。その際に、エリクソンと「モニター」はアメリカの政治理念と技術的達成を同時に体現する効果的なシンボルとしての機能を担わされたのだった。

SARLI は自らが描き出したエリクソン像を広く社会に認知させることに腐心した。毎年のエリクソン記念晩餐会には連邦政府の閣僚やイリノイ州の各自治体の首長など、非スウェーデン系の要人も招かれるのが常であった。1912 年はハンプトン・ローズの戦いの 50 周年とあって、各地のスウェーデン移民集住地で記念行事が行われた年だが、SARLI はこの年の 3 月 9 日をシカゴ市の「スウェーデン系アメリカの日」(Swedish American Day) とさせることに成功し、同市内で開催した記念晩餐会にタフト大統領を筆頭におよそ 1100 人もの出席者を集めた。エリクソンと「モニター」の記念はスウェーデン系アメリカ人が多く住んだシカゴを中心としたイリノイ州と、エリクソンがアメリカでの定住地としたニューヨークで主に行われるものであったが、SARLI は首都ワシントンにおいてエリクソンが記念されることを望み、この 50 周年に合わせて注文したエリクソンの肖像画とハンプトン・ローズの戦いの模様を描いた絵画をワシントンのナショナル・ギャラリーに寄付した<sup>22)</sup>。こうしたスウェーデン移民社会による努力は、アメリカの歴史のショーケースたるワシントン・モールにエリクソンを記念する場所を確保しようとする運動へと結実していくことになる。

#### 4 ワシントンにおけるエリクソン記念像建立

いくたびかの不首尾に終わった計画立案を経て、1916年、ニューヨークのスカンディナヴィア系市民団体の有志の要望を受けた法案が連邦議会を通過した。この法案はエリクソンを記念する建造物に3万5千ドルを支出するもので、一般のスウェーデン系市民から募った寄付によりさらに2万5千ドルが積み増しされた<sup>23)</sup>。この事業を公式に担当したのは政府関係者4名から成る「ジョン・エリクソン記念委員会」(The John Ericsson Memorial Commission)だが、記念像建立のために実質的に働いたのは同委員会の市民による支援委員会(Citizens' Auxiliary)であった。この委員会の長は何度かの交代を経て、記念像が除幕される時にはチンドブロムがその役に就いていた。チンドブロムが幹部を務めたSARLIは1918年に「イリノイ州ジョン・エリクソン共和党同盟」(The John Ericsson Republican League of Illinois)と改称しており、エリクソンの記念と記憶を組織の存在意義の中心とすることがより鮮明になったと言ってよい。ワシントンの記念像事業のための市民委員会は、除幕式以前に死去した5名を含めると総勢55名から成り、うち23名がニューヨーク州、15名がイリノイ州の在住者であった<sup>24)</sup>。存命の50名は、当日のチンドブロムの言葉によれば「一人を除いて全員がスウェーデン系のアメリカ人」であり、この事業がアメリカ国内の異なる地域をまたぐスウェーデン系社会内のネットワークに支えられたものであったことがうかがえる<sup>25)</sup>。また、政治関係者のみの事業でもなかったことは、スウェーデン系アメリカ人社会における高等教育と出版の中心を担い、移民共同体の重要な精神的支柱でもあったオーガスタナ・カレッジ(Augustana College and Theological Seminary)の学長が市民委員会の構成員に名を連ねていることで分かる<sup>26)</sup>。

エリクソン記念像の除幕式は1926年5月29日に行われた。公募によって決定した記念像の意匠は、極めて民族的色彩が濃く、かつ寓意に満たされたものとなった。花崗岩の巨大な台座の上に航海用のコンパスをかたどった円形の台があり、その上に北欧神話における生命の樹「イグドラシル」を背中合わせに囲んで3体の人物像が立っている。「冒険」を表す像は盾と剣を手にしたヴァイキングの姿、「労働」を表す像は鉄を加工する男性の姿、「<sup>ヴィジョン</sup>構想力」を表す像はたった今ある靈感を受けたというまなざしを正面に投げる女性の姿である。この3つの寓意はエリクソンの知力の特質を表すものとされる<sup>27)</sup>。台座の側面にはぐるりと「ジョン・エリクソン

AD1803 AD1889 モニターの創案者にして建造者 彼はスクリープロペラの発明により航海術に革命をもたらした」と北欧風の字体で彫っており、思索するエリクソンの像が寓意像を背にして台座の端に腰掛けている。設置場所は4年前の1922年に完成したリンカン・メモリアルを間近に望む位置であり、南北戦争の英雄としてリンカンやグラントに近い扱いをとるスウェーデン系アメリカ人社会の希望を反映したものになった。

5千名もの出席者があったというこの除幕式は、SARLIを初めスウェーデン系アメリカ人社会の文化的リーダーたちにとっては、ワシントンというアメリカの歴史を顕彰する土地に、自集団のアメリカへの貢献を証明する場所がしつらえられるという晴れ舞台であったはずである。しかし、式全体の基調は、スウェーデン系アメリカ人組織の主催する式典でよく見られたようなアメリカにおけるスウェーデン移民の歴史と貢献を称えるものではなく、アメリカ合衆国とスウェーデン王国との国家間友好関係を強調するものとなった。スウェーデン系の市民たち自身の働きかけにより除幕式に出席していたスウェーデン皇太子夫妻の存在もそうした印象を強めていた。式典では音楽演奏と海軍長官の挨拶に続いて皇太子妃が記念像の除幕の紐を引き、クーリッジ大統領が祝辞を述べた。合衆国の国家史を記念する場所に北欧の歴史と文化への言及に彩られた記念像を建立する一方で、式典がアメリカとスウェーデンの間の儀礼的交流の場として設定された背景には、1920年代における移民排斥運動の高まりによって、移民共同体の文化的リーダーたちが難しい舵取りを迫られていた事情があるであろう。

華やかな来賓たちによる儀礼が除幕式の主役となった一方で、この事業を支えた一般市民たちは記念の花輪贈呈によって代表された。チンドブロムのこの日の役割は、スウェーデンとアメリカの各種団体が用意した花輪の贈呈の司会を務めることであった。チンドブロムが一つ一つ名前を読み上げたこれらの団体は、スウェーデン側（11団体）は海軍関係者団体、米瑞友好団体、科学・技術関連団体に大別でき、特に技術学校が目立つ（5校）が、アメリカ側は18団体中11団体がスウェーデン系及びスカンディナヴィア系の職業団体や友愛団体であった（残りは退役軍人会、地方自治体など）<sup>28)</sup>。ここから読み取れるのは、スウェーデンにとってのエリクソンは何よりもまず優れた技術者であり、技術の世界において記憶されるべき存在であるのに対し、アメリカにおけるエリクソンは技術界の先達としてだけでなく、スウェーデンからアメリカへ渡った人々すべてを代表する「偉人」として位置づけられているということである。

「偉人」あるいは文化的「英雄」という存在の意義が、文化史家のジェフリー・キュービットのいう「模範としての人生」(exemplary lives) にあり、「そのような人生が評価され賞賛されるのは、実際に役立つ業績のためだけではなく(また必ずしもその理由によってでさえなく)、教訓的・倫理的・社会的真理や価値を体現し、かつ具体例を示すことでそれらの価値を他の人々の心に銘記するから」<sup>29)</sup>であるとすれば、この記念像が表現するエリクソンは、その発明が南北戦争やその後の海洋技術に与えた影響の範囲とは別に、寓意像に込められた倫理的価値をスウェーデン移民共同体の価値観と重ね合わせる役割を与えられていたといえる。そしてそれこそが、スウェーデン系アメリカ社会の文化的リーダーたちの求めるところであり、アメリカ主流社会に向けて発信したい自己像でもあった。インスピレーションが生む「構想力」を、未踏の地に分け入る「冒険」心とたゆまぬ「労働」によって現実化していく人間のあり方。それは北欧人の模範であると同時に、技術的革新という果実を産することでアメリカ産業社会に進歩のための養分を絶えず送り続けることのできる、科学・技術時代における理想のアメリカ人像でもあった。

#### 4 移民集団の文化的アイコンとしてのエリクソンと「モニター」

「モニター」と「ヴァージニア」の対戦後の熱狂と戦後における忘却、世紀末に至っての再度のブームと伝説化、1920年代にまで及んだエリクソンの「英雄」像の強化一。その背景で進行していたのは、消費財とマスメディアを媒体とした、科学と技術の万能性を主張する言説・イメージの生産と流布であった。ミンデルは先に紹介した著作の中で、「モニター」の衝撃が商品や大衆文化の形でアメリカ社会内に流通したことを指摘している。ハンプトン・ローズの戦いの直後には「モニター」の名を冠した「葉巻、スーツ、帽子、トランプ、歌、『モニター』印の小麦粉まで」<sup>30)</sup>が登場し、1890年代の南北戦争回顧の時代には、戦う「モニター」の図が農業用機械の宣伝ポスターで機械化の時代の象徴として使われた<sup>31)</sup>。ちょうどその頃、科学・技術をテーマとする非専門家向けの雑誌が続々と創刊され、新技術や科学的発見のニュースを伝える一方、技術革新がもたらす未来像を一般大衆に向けて振りまき始めた。こうしたマスメディアの中ではテクノロジーはあらゆる難題を解決し得る処方箋として表現され、それが可能にする未来社会は理想郷としてイメージされた<sup>32)</sup>。同様の未来像は文学でも展開され、広く読者を得る作品もあった<sup>33)</sup>。このようなアメリカ主流社会の思

想的変容の文脈に、エリクソンと「モニター」は置かれなければならない。

19・20世紀の転換期を挟んだ数十年の間に、産業資本主義の発達とそれに伴う社会システムの再構築に加え、流通する消費財の表象するメッセージやマスメディアの伝達するイメージが、アメリカ社会を物理的環境と心性の両面から変えつつあった。それは、科学・技術の力を絶対視し、テクノロジーを制御する力をアメリカ性そのものと同一視する、新たなアメリカニズムの誕生であった<sup>34)</sup>。この状況の下で、移民という社会の周辺的カテゴリーの中から主流社会への合流をうかがうためには、自集団を語る物語の内にテクノロジーのイメージを組み込むことが戦略として有効性を持ったのである。多くの移民集団が自集団の英雄や功績を顕示することを競い合っていた時代に、スウェーデン移民はドイツ移民が誇るような文学や音楽といった、旧来のナショナリズムの枠組みで文化的英雄を輩出してきた分野においては、アメリカの文脈にふさわしい英雄を見つけることができなかつた。ある移民集団の結束を高めたり、その集団が自らのものとして標榜する美点を象徴したりといった機能を特定の英雄イメージが発揮するためには、その人物が国境を越えた知名度を持つことに加え、移民集団内の合意が得られる存在であることが不可欠となる。教会やスウェーデン王制に対する立場の違いからしばしば内部での対立がみられたスウェーデン移民社会にとっては、エリクソンは宗教からも王制からも遠く、かつ自由というアメリカの伝統的政治理念と、テクノロジーという、同時代に眼前で形成されつつあったアメリカを象徴する要素を併せ持っていたために、願ってもない英雄的存在となったといえよう<sup>35)</sup>。

エリクソンと「モニター」がスウェーデン移民共同体の民族性とアメリカ性を同時に象徴する文化的アイコンとして成立するためには、テクノロジーが「新しいもの」であることは重要であった。民族・国民を階層化して認識する世界観が支配的であった時代において、欧米世界で長く評価されてきた文化的遺産を比較的持たない小さな集団が既成の社会構造の中で新たに権力や利益を得るためには、既成の権力層が持っていないもの、あるいは既成の権力層と同じ土俵で競えるもので対抗しなければならない。スウェーデン移民社会のリーダーたちは、テクノロジーをそうした新しい競技の場として捉えた。言い換えれば、テクノロジーは民主主義的な手続き—平等な権利と参加の意志に基づく—によって入手可能な、新たな文化的資本として認識されたのである。そのようなテクノロジーのあり方は同時に、アメリカそのものがヨーロッパに対して自己を対等なもの、あるい

はヨーロッパ以上に優れたものとして位置づけようとした際にテクノロジーに託した役割と相似の関係にある。

1940年代に技術職を目指したスウェーデン系の若者たちは、エリクソンや「モニター」の活躍の物語に直接の刺激を受けて進路選択を行ったというわけではおそくない。しかし、彼らの人生の選択に影響を与えたであろう2つの力、すなわち彼らに先行する世代の移民たちがテクノロジーに寄せた期待と、アメリカ社会に張り巡らされた葉脈を伝う水のように流れる科学・技術信奉のイデオロギーは、エリクソンと「モニター」、エジソンと電灯光が代表するような、文化的アイコンとしての発明家／技術者／科学者とその創造物を、自らのイマジネーションの糧として取り込むことによって成長していったのである。そうした意味では、エリクソンと「モニター」はスウェーデン系という特定の移民集団にとっての文化的アイコンとして、集団のものとして仮定される技術的才能の優秀性と倫理的価値を表象すると共に、テクノロジーを統御することで荒野に文明を立ち上げる者という、アメリカ社会全体に浸透する自己像を表象するものであったともいえるであろう。

[付記]

本稿は、平成20年度科学研究費補助金（基盤研究A）「近代移行期の港市における奴隷・移住者・混血者—広域社会秩序と地域秩序」（課題番号19202019）・平成20年度科学研究費補助金（基盤研究B）「18世紀末から20世紀前半までの英米のユートピアニズムの政治批評的研究」（課題番号17320044）に研究分担者として参加した成果の一部である。

---

<sup>1)</sup> Thomas Dalhasen (author) and Jack LaFrandre (producer), script for WGN Radio program "The Swedish Population in Chicago," in *The Chicago Story* series, broadcasted on January 3, 1945 [1946], 8. このシリーズは全25回で、1945年11月1日から1946年4月11日まで放送された。この回はシリーズ第11回。

<sup>2)</sup> Thomas P. Hughes, *American Genesis: A Century of Invention and Technological Enthusiasm, 1870-1970*, reprint ed. (Chicago: University of Chicago Press, 2004; New York: Viking Penguin, 1989), 7, 17, 29, 118; Cecelia Tichi, *Shifting Gears: Technology, Literature, Culture in Modernist America* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1987), 19-26.

<sup>3)</sup> Joseph J. Corn, "Introduction," in *Imagining Tomorrow: History, Technology, and the American Future*, ed. Joseph J. Corn (Cambridge: MIT Press, 1986), 1-2.

<sup>4)</sup> Hughes, *American Genesis*, 15, 138-39; Corn, "Introduction," in *Imagining*

---

*Tomorrow*, 5.

- <sup>5)</sup> H. Arnold Barton, *The Old Country and the New: Essays on Swedes and America* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 2007), 265.
- <sup>6)</sup> David A. Mindell, *War, Technology, and Experience aboard the USS Monitor* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2000), 142.  
チャーチによる伝記は以下の通り。William Conant Church, *The Life of John Ericsson* (New York: C. Scribner's Sons, 1890; S. Low, Marston & Co., 1892).
- <sup>7)</sup> Olav Thulesius, *The Man Who Made the Monitor: A Biography of John Ericsson, Naval Engineer* (Jefferson, NC: McFarland & Company, Inc., Publishers, 2007), 218-26.
- <sup>8)</sup> 「モニター」以前のエリクソンの生涯については以下を参照。Mindell, *War, Technology, and Experience*, 33-38; Thulesius, *The Man Who Made the Monitor*, 5-66; James Tertius deKay, *Monitor: the Story of the Legendary Civil War Ironclad and the Man Whose Invention Changed the Course of History* (New York: Ballantine Books, 1997), 9-31.
- <sup>9)</sup> *Times* (London), 7 April 1862, 8. 「2隻を除いた」とは、当時のイギリス海軍が装甲艦を2隻所有していたことを指す。
- <sup>10)</sup> Mindell, *War, Technology, and Experience*, 113-20.
- <sup>11)</sup> *Ibid.*, 135-37.
- <sup>12)</sup> *Ibid.*, 141-42; deKay, *Monitor*, 224; Thulesius, *The Man Who Made the Monitor*, 214-17.
- <sup>13)</sup> Eric Johannesson, "The Flower King in the American Republic: The Linnæus Statue in Chicago, 1891," in *Swedish-American Life in Chicago: Cultural and Urban Aspects of an Immigrant People, 1850-1930*, ed. Philip J. Anderson and Dag Blanck (Urbana: University of Illinois Press, 1992), 272.
- <sup>14)</sup> Dag Blanck, "Becoming Swedish-American: The Construction of an Ethnic Identity in the Augustana Synod, 1860-1917" (Ph.D. diss., Uppsala University, 1997), 172, 194-96.
- <sup>15)</sup> Lars Ljungmark, *Swedish Exodus* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1979), 105.
- <sup>16)</sup> *Proceedings of the Convention of the Swedish American Republican League of Illinois, March 9th 1895, and of the first John Ericsson Day Dinner given under the auspices of the Swedish American Central Republican Club of Cook County at the Grand Pacific Hotel, Chicago* (n.p., n.d.), 4-7.
- <sup>17)</sup> Professor C. R. Chindblom, Chicago, Ill. in *Proceedings of the Convention of the Swedish American Republican League of Illinois, March 9th 1895*, 24-27.

- 
- 18) Ibid., 26.
- 19) C. R. Chindblom, "Toast: Capt. John Ericsson," in *Proceedings of the Convention of the Swedish American Republican League of Illinois, March 9th 1898* (n.p., n.d.), 27.
- 20) Corn, "Introduction," in *Imagining Tomorrow*, 5.
- 21) M. O. Williamson, "Toast: Good Citizenship," in *Proceedings of the Conventions of the Swedish American Republican League of Illinois, March 9-10, 1896, and March 9-10, 1897* (n.p., n.d.), 52.
- 22) Ernst W. Olson, *The Swedish Element in Illinois: Survey of the Past Seven Decades* (Chicago: Swedish-American Biographical Association Publishers, 1917), 337-41.
- 23) Erik G. Westman, E. Gustav Johnson, and et al., eds., *The Swedish Element in America: A Comprehensive History of Swedish-American Achievements from 1638 to the Present Day* (Chicago: Swedish-American Biographical Society, 1931), 60-62.
- 24) 他の内訳は、ミネソタ州4名、その他中西部6名、その他東部5名、西海岸2名。Sixty-Ninth Congress, First Session Senate Document No.161, *Proceedings at the Unveiling of the Statue of John Ericsson in Potomac Park, Washington D.C. under the auspices of the John Ericsson Memorial Commission, May 29, 1926* (Washington: United States Government Printing Office, 1929), 15-16.
- 25) Ibid., 53.
- 26) Ibid., 15, 56. 同カレッジの所在地はイリノイ州ロックアイランド。
- 27) Westman, *The Swedish Element in America*, 62-63.
- 28) *Proceedings at the Unveiling of the Statue of John Ericsson*, 53-57. 他にキューバのスウェーデン人団体からの献花があった。
- 29) Geoffrey Cubitt, "Introduction: Heroic Reputations and Exemplary Lives," in *Heroic Reputations and Exemplary Lives*, ed. Geoffrey Cubitt and Allen Warren (Manchester: Manchester University Press, 2000), 2.
- 30) Mindell, *War, Technology, and Experience*, 78.
- 31) Ibid., 3.
- 32) Susan J. Douglas, "Amateur Operators and American Broadcasting: Shaping the Future of Radio," in *Imagining Tomorrow*, 37-41.
- 33) Howard P. Segal, *Technological Utopianism in American Culture*, Twentieth Anniversary ed. (Syracuse: Syracuse University Press, 2005; Chicago: University of Chicago Press, 1985).

<sup>34)</sup> Merritt Roe Smith, "Technological Determinism in American Culture," in *Does Technology Drive History? The Dilemma of Technological Determinism*, ed. Merritt Roe Smith and Leo Marx (Cambridge: MIT Press, 1994), 5-8, 13.

<sup>35)</sup> 移民社会内部で合意可能な英雄の条件については Johannesson, "The Flower King in the American Republic," 269-72 頁、スウィディッシュ・アメリカニズムに基づく他の英雄の例については Barton, *The Old Country and the New*, 88 頁を参照。